# 一人芝居『口火きる、パトス』（作・山本タカ）

《作者メモ》

本作品は、男性役の一人芝居ですが、女性が男子生徒の制服、もしくは、ジェンダーレスな制服を着て演じても良い。
舞台装置少なく演じられる一人芝居ですので、高校演劇などでも上演時間は、初演上演時は４５分程度だったが、演出や演者の演じ方で５５分程度の演劇にもできるかと思います。

これは、一人で演じることを前提にした台本である。
当然、主人公の柳幹久以外は、マイム、もしくは人形などを使用して表現されることとなる。が、その方法は、演出家に一任することにする。
また、柳のセリフ中に、「」で示されるカッコ書きは、作中に登場する他の登場人物が言った言葉、もしくは手紙に書かれていることを、復唱しているものと解釈して差し支えない。

【登場人物】

柳　幹久（やなぎ　みきひさ）……高校３年生。弁論部部長。偏屈の極みの様な高校生。

## 一幕

### 【1】

暗転、開けると、そこは弁論部の部室である。
柳は凛々しく窓から校庭を睨んでいる。
部室内には、後輩の芹沢（せいりざわ）がいる。

柳　　芹沢。あれを見ろ。

柳　柳、指を指す。

柳　仲むつまじげに、サッカー部の副キャプテンとソフトテニス部の女子が帰っているな。あれを見て、芹沢。どう思う？　……そうだな。ふしだらだ。奴らは県内屈指の進学校である我が校に入学しておきながら、球遊びに興じ、あまつさえ色恋に現を抜かしている。芹沢、よく見ておけ。

柳　柳、芹沢を引き寄せ、頭を掴み同じ光景を見せる。

柳　あれが、人間の堕落した姿だ。

柳、芹沢を解放する。

以下、丸カッコ内は、芹沢の返事の想定である。

柳　芹沢、お前にはこの弁論部唯一の部員、そして後輩として、この俺の持っている全てを叩き込もうと思っている。嬉しいか！（はい！）声が小さい！　嬉しいか！　（はい！）嬉しいか！　（はい！）嬉しいか！　（はい！）そうだろう！……かのソクラテスは言った。弁論には三つの重要な要素がある。（指を掲げ）ロゴス、復唱！　（「ロゴス！」）即ち論理！　エトス！　（「エトス！」）即ち信頼！　そしてパトス！（「パトス！」）即ち情熱だ！　情熱とは、大きい声である！　わかったか！　（「はい！」）弁論は、古代ギリシャに起源を置く、非常に高尚な嗜みであり、社会的教養だった。弁論の巧みさこそ、優れた智者の証であったし、人々の尊敬の基準であった。対して、サッカーは、８世紀のイングランドにおいて、負けた敵方の将軍の生首を蹴ったことが起源とされている！　いいか！　芹沢！

柳　芹沢の頭を窓際に持ってくる。

柳　サッカーは、蛮族の遊びだ。

柳　弁論とスポーツ、どちらが素晴らしいか、比べるべくもない。しかし、この島国、こと学校においては、運動能力というものが、そのままクラスヒエラルキーに直結する。おかしいな！（はい！）悔しいな！（はい！）羨ましいな！（はい！）馬鹿野郎！（殴る）誇りを持て、芹沢。高校生日本語弁論大会準々優勝の俺が、お前を指導してやろうというのだ。……言っておくが、俺は、すぐ手が出るタイプだ。言葉の力を知っているからこそ、それが無力になる瞬間を知っている。覚悟するように。

柳、芹沢を解放する。

学校のチャイムが鳴る。

柳　よし。今日のところはこれで終わる。

柳、帰り支度をして自転車にまたがる。

【2】

柳、自転車をこぎながら帰り道を行く。
田舎の国道は、自動車の走行音がうるさい。

柳　（独白）学校と家までの約12キロ、40分以内で走るのだ。トラックの往来がやかましい6車線の巨大な国道沿いには、ケーズデンキにスーツの青木、串カツ田中に、オートバックス。看板にスキー用品店の名残を残したままのあそこは……また店が変わるのか。

柳、歩道橋に差し掛かり、自転車のこぐ足が強まる。

柳　ふ！この歩道橋の、スロープを、足を、つかずに、上りきれるか、それが、俺の、身体能力の、バロメーターだ。……よし。

柳、歩道橋を登りきり、反対側のスロープを勢いよく降りていく。

柳　何百回と降ったこの歩道橋のスロープのカーブも、今は、ほぼ速度を落とさずに、降っていける。

大型ショッピングモールの駐輪場に、自転車を止め、本屋に行く柳。

柳　下校時には、地元ショッピングモール、〇〇（地元で有名なショッピングモールの名前）の書店で5分だけ本を読む。

柳、本を速読する。二、三度猛スピードで本をパラつかせる。

柳　っふぅ。……なるほど、日本の経済も単純ではないな。

柳、本を書棚に戻そうとすると、フードコートにいる生徒を認める。

柳　ん？……は！　あいつは、去年の大会で俺を負かした、本峰（もとみね）！

柳、本で顔を隠す。

柳　（目だけ覗かせながら）。……フードコートで女生徒と二人。なぜ一つのソフトクリームを二人で食べる必要がある。プラスチックスプーンは二つ貰えばいいだろう！　無料なんだから！　……だらしない顔をしやがって。……くそ、あんな奴に俺は、負けたのか。

柳、しばらく見つめた後、腹立たしげに本をしまい、シ

ョッピングモールを後にする。

【3】

家に帰った柳は、腹立たしげにいう。

柳　ただいま。

母親が来るが、母親は柳の様子を見て心配をしてくる。

柳　いや、怒ってはいないよ。大丈夫。大丈夫だから。お母さん！（必死に自分の感情と格闘しながら)ごめん、声を荒げたりして。あんまり深く詮索しないでくれ。できれば……この段になって反抗期に突入したくない。

柳、自室に入る。カバンを投げ出し、学ランのポケットより、高校生日本語弁論大会の銅メダルを取り出す。

柳　あの大会、僕のスピーチは完璧だったはずだ。

柳、銅メダルを強く握る。

柳、銅メダルを投げようと拳を振り上げた瞬間、回想に入る。

審査員の一人をホールのロビーで見つける柳。

柳　審査員！待ちなさい！（銅メダルを差し出しながら）僕が三位なんて納得ができません！　全く評価基準に準じてないじゃないですか。それに講評も論理的じゃない。「胸を打ったか否か」？　なんですかその曖昧な理由は！

手が出そうになる、柳。しかし、必死に押しとどめる。

柳　いいでしょう。なら、僕の弁舌の何が胸を打たなかったか言ってごらんなさい。……「高校生らくしない？」っは！出た出た出ましたねぇ。大人！　これは優れた演説を競う大会です。スポーツに置き換えてみてくださいよ。サッカーの大会で、高校生らしからぬプレーをしたから得点が取り消しになりますか？高校生らしからぬ走り方で、陸上競技のタイムが変わりますか？……どうですか。三流大学の隅っこでダラダラと退屈な講義を垂れているあんたには、僕のスピーチの素晴らしさがわからないんだ。……え？なんです？……もういっぺん言ってごらんなさい。……「君は、人の心が、あまりわからないようだね」……ふざけるなぁ！

柳　と、柳が銅メダルを投げようとした瞬間、回想は終わる。

柳　あの時、もしもこの銅メダルがあの審査員の顔をかすっていたら、メダル剥奪はもとより、出場停止、下手したら、退学になっていたかもな。

柳　柳、再び、銅メダルを握りしめ。

柳　なんだ、人の心をわかってないって。……本峰にあって、俺にないものは何なんだ。

柳、銅メダルを、内ポケットにしまう。

## 【4】

チャイムの音

翌日、芹沢を指導する、柳。一層熱が入っているように見える。

柳　芹沢！　声が小さい！　そんな声量では、聴衆に熱意は伝わらん

ぞ！　キング牧師を超えるんだろう！　ウィンストンチャーチルを超えるんだろう！　スティーブ・ジョブズを超えるんだろう！……どうした、芹沢。今日は一段と覇気がないぞ！

芹沢の様子を見て驚く柳。

柳

……お前、泣いているのか？　え？　「辞めさせて欲しい」？　どうした？　なんでだ。俺の、指導が、厳しすぎたか？　「それもある。でも、そうじゃない」？　暴力か？　「それもある、でもそうじゃない。」じゃあ何だ。言ってみろ。……え？「好きな人ができた？」芹沢！

柳、芹沢を強く打つ。

柳

馬鹿野郎！　目を覚ませ芹沢。今、恋愛なんぞしても、将来に何の役にも立たん。サッカー部の奴らを見てみろ、球蹴りに恋愛、実社会では何のイニシアチブも取れない遊びに時間を費やしている。愚かの極みだ。わかるぞ、芹沢、俺たちは、思春期だ。そういう気の迷いはわかる。だが、我々は、それらの気の迷いをグゥッと押し殺して押し殺して押し殺して遠い先の勝利を掴みとろうとしているのだ。芹沢！　目を覚ませ！？　何故女人(にょにん)一人にそれほどうつつを抜かすんだ？　え？　何故だ！？　何があった！？言ってみろ！……「出会った瞬間、体に衝撃が走った。目があうと、胸が高鳴って、頭の中が真っ白になった」？　馬鹿野郎！　お前の惚気を聞きたいわけじゃあないんだ、俺は。

柳、少し、冷静さを取り戻し。

柳

……それにお前、ここをやめてどうする。他に入るあては決まっているのか？　何だったら、籍だけおいて……え？　「サッカー部に入る」？　「その方がモテるから」？　裏切り者！

柳、芹沢をボコボコにする。
芹沢が声をあげることで、柳の手が止まる。

柳　「部長は、人を好きになったことがないから、僕の心がわからないんですよ」？

柳、再び、カッとして手が出そうになるが、出さない。

柳　出て行け！お前なぞ顔も見たくもない！

芹沢、出て行く。

柳　くそ。どういう意味だ。まるで、俺が、恋愛経験に乏しいから、人の心をわかってないみたいじゃないか。……理解できん。理解できんぞ。「出会った瞬間、体に衝撃」「目があうと、胸が高鳴る」「頭の中が真っ白」……

その三言を暗唱しながら、自転車置き場に行く柳。

## 【5】

柳、自転車をこぎながらも、ずっと暗唱している。

柳　「出会った瞬間、体に衝撃」「目があうと、胸が高鳴る」「頭の中が真っ白」(腕時計を見る)ぬ！　いかん。思考に気を取られ、いつものペースより落ちている。

柳、スピードを上げる。

柳　「出会った瞬間、体に衝撃」「目があうと、胸が高鳴る」「頭の中が真っ白」ふ！

そのまま暗唱しながら歩道橋の登りに突入し、降りる。

柳　(暗唱していると、前に人が)……っは！危ない！

ブレーキをかける柳、しかし、自転車は宙を舞って一回転する。その様子は、スローモーションのようになる。

柳　(回転しながら)散漫になった注意力は、目の前に現れた自転車に驚き、急ブレーキをかけさせた。突如前輪を止められた自転車は、車体のスピードを押しころせず、そのまま後輪を宙に浮かせ一回転。世界が見たことない角度で目に飛び込んでくる中、先ほど現れた自転車の主が、同校の制服を着た女生徒なのだとわかった。

ものすごい音とともに、柳、歩道橋の踊り場に投げ出される。

柳　あああ！…いっつっつ。

女生徒が心配して近づいてくる。

柳　ああ、大丈夫、大丈夫です。え？　血？　大丈夫です。そんなハンケチなんて。ああ、すいません。

女生徒の差し出すハンケチを受け取る柳。
音楽。

柳　その時俺は、気がついた。今、俺は思春期に突入してこの方初めて、母以外の異性に優しくされている！　「出会った瞬間、体に衝撃」「目があうと、胸が高鳴る」「頭の中が……

柳、動揺を隠せない。

柳　（テンパリながら）え？　このハンケチ、お借りして？　ああ、ぬん。あり、ありがとう、ます。はい、もう、その、あれです、大丈夫、な、はい、それです。

女生徒が帰ろうとする。

柳　ああ、あの！　お名前を教えてくれませんか？　という言葉でさえも、その時の僕からは出なかった！

暗転。

## 二幕

### 【6】

柳、頭に絆創膏をしている状態で、弁論部の部室にて一人、校庭を眺めている。

柳　まさか、昨日の女生徒が我が校のサッカー部のマネージャーとはな。……不覚だ。この柳幹久ともあろうものが、いくら不慣れとはいえ、女人を前にして、言葉が全く出てこないとは。

柳、校庭をにらみ。

柳　畜生。芹沢め、ヘアバンまでしやがって。すっかりサッカー部面になっているじゃないか。なんだあの色とりどりの練習着は、蛮族の格好だ。みろ、普段ろくに運動しない癖に、急に球蹴りの練習なんかするから、目が回っているじゃないか。……あ！　気安くその女生徒と話すんじゃあない！　飲み物ぐらい自分で作れ！（自分の行動にに気づき）……何をやっているんだ、俺は……かの女生徒とは、ただの一度、会話をしただけだ。別に裏切り者の芹沢と話そうと、何を構うことがある。これじゃあ、まるで、俺が、あの女生徒のことを……あの、女生徒のことを。あああ！

再び自らを打つ、柳。

柳　しゃんとしろ、柳幹久。

校庭を見る。

柳　芹沢が笑っている。そんなに楽しいのか。球蹴りは。

柳、芹沢と女生徒の視線を感じ、身を隠す。

柳　っは！

隠れながら。

柳　危ない危ない。俺が羨ましげな視線を投げているところを危うく芹沢に見られるところであった。(自分でびっくりして)羨ましげに！？　今、俺は、羨ましげにと言ったのか。おいおい俺の口よ、血迷うな！

また柳は、自分を殴ろうとするが、やめる。

柳　……いい加減、認めろ、柳幹久。お前の口は、舌は、何よりも正直だったはずだろう。

柳、部室をキョロキョロと見回し。

柳　うん、そうだ。試しに言ってみるのだ。表現が適切かどうか、口に出してかめてみよう。

柳、深呼吸をして、言ってみる。

柳　俺は、あの女生徒に……興味を抱いている。

柳、息を吐き。

柳　っふう。うん、そうだな。間違ってはいない。間違ってはいないぞ。よし……。俺は、あの女生徒のことが気になっている。

心臓が一瞬波打つ。

柳　ふぅ！うん。そうだな、だんだん適切な表現に近づいてきているきがする。俺は、（集中し）……俺は、あの女生徒とのことが好きだ。

柳、急に心臓が早鐘のように打つ。

柳　っは！　はぁはぁ。ああ、痛い、心臓が痛い。くそ、俺の知りうる知識の中で、俺の抱くこれは、恋というものの条件にことごとく該当している。

柳、頭の絆創膏をさする。
そして、前のシーンで渡された、可愛らしいハンケチを取り出す。
柳、ハンケチの匂いを胸いっぱいに吸い込む。

柳　このハンケチをまだ俺は、洗えずにいる。俺の鉄臭い血の匂いのその奥から、まだ柔軟剤の匂いがするのだ。……返さなきゃ。でも、返したら、あの女生徒のつながりは、切れてしまう。返したくない。いや、返すべきだ。そもそも、返す時にまともに俺は話せるのか。アドリブは苦手なんだ。変に周囲の生徒の目について、冷やかされたのでは溜まったものではない。

柳、思考を回らせるために独特な動きをする。

柳　文通。そうだ！　文通だ！彼女の下足箱に、ハンケチと一緒に手紙を添えるのだ。しかも俺の住所を書いておけば、返信も期待できる！　おっと、礼節欠いてはいかん、返礼の品と共にだ。

柳、原稿用紙束を取り出して、もの凄いスピードで

柳　背景　優しい女生徒殿。晴天が続く盛夏のみぎり……先生！

と、柳が言うとそれは翌日の教室である。

【7】

柳　普段の鞄に、もう一つ、黒い大きな手提げ袋をもている。突然ですが、頭痛がひどいので早退します。ええ、かなりひどいです。確かに涼しい顔をしているように見えるでしょうが、今も鈍器で殴打されるような痛みが、断続的に続いています。どうぞ、授業を続けてください。心配や、付き添いは結構。

柳、学校の廊下を渡り、女生徒の下足箱前に行く。
周囲をキョロキョロと見回し、誰もいないことを確認すると。黒い手提げから、ハンケチ、分厚い茶封筒に入れられた手紙、そしてノシ袋で「御礼」とはられた箱入りの茶菓子を取り出し、下足箱に入れる。
入れた後に一念入れて、去る。

柳　よし、抜かりない。茶菓子に関しては、二、三迷ったが、舟和の芋羊羹８個入り（↑ご当地のお菓子に変更しても良い。）で決着した。手紙に関しても一晩推敲に推敲を重ね、感謝の念を序論、本論、結論に分けて論じ、導かれる様に文通相手としての申し出につながっている。人事尽くして、天命を待つこと、三日！

【8】

柳、自宅に据え付けられた郵便ポスト前にて。

柳　今日こそ、この郵便受けの中に返答があってもおかしくない。

柳、念を入れて、自宅の郵便ポストを開く。がその中には手紙はない。

柳　が！くそ！日本郵政は本当に仕事をしているのか！？

柳、腹立たしげに郵便受けを戻す。

自宅の扉を開け。

柳　ただいま！　え？　お母さん、そりゃあ僕も思春期ですから、情緒はそれなりに不安定ですよ！　いけませんか！？　……え？　手紙？　僕宛にですか？

柳、リビングに置かれた手紙束の中から急いで手紙を見つけに行く。

柳　(差出人を見て)……きたぁ！　よし！　薄！　まぁよし！　お母さん。今から僕がいいというまで、部屋の扉を開けてはダメですよ！

と言って、柳、自室に猛スピードで戻っていく。

柳、丁寧に、手紙の封を解く。

柳　「お手紙、ありがとうございます。同じ学校だったんですね。何部に入っていますか？私は、サッカー部のマネージャーをしています。もし、陸上部や、野球部だったら、グラウンドで会ってるかもしれませんね。」

柳、思考を巡らし。

柳　短い！　６行。意図を図りかねる。……行間を読め、行間を読むんだ。「柳さんは、何部ですか？」問いかけ。返答を期待している。文通相手の申し込みに応じたと考えていい。「私は、サッカー部のマネージャーをしています。もし、陸上部や、野球部だったら、グラウンドで」くそ！　彼女は俺が運動部であることを期待している！　……スポーツはやったことがない。……部活を偽るか？(突如自分を殴る柳)恥を知れ！　柳！　弁論部たる誇りを持て！……いい。嘘をつく必要はない。俺がスポーツを経験すればいいのだ。……芹沢にサッカーを教わるか？バカな。それこそ恥知らずもいいところ。……くそ！　考えろ。考えるんだ。難しいことじゃあない。サッカーなんて近所のガキもやっている遊びだ。……近所のガキ？

柳あることを思いつく。決心して、筆をとる。

柳　「お手紙ありがとうございます。僕は文化部なのですが、奇遇ながら、サッカーはよく嗜んでおります。」

柳、手紙を書き、自室の扉を開け。

柳　お母さん！運動着ある！？

柳が学ランを脱ぐと、その下には、母が用意した冴えない運動着。

【9】

運動着を着てサッカーボールを抱え、近所の公園にやってきた柳。

柳　（極めて上から目線で）やぁ、やぁ、公園で戯れる小学生達。元気に遊んでいるようで何より！　君たちの中に、サッカー経験者はいるかね。(挙手を求める)うん、うん。そうか。結構結構。よし、君たちの実力を見込んで、今から俺にサッカーを教える権利をやろう。なんだ、ぽかんとした顔をして。違う、友達がいないんじゃない。変な人でもない！　……児童！年長者が頼んでいるのだ。素直に教えんか！　え？　人にお願いをする時は、きちんと頭を下げて？　なんだそれは、君の母親の教えか。馬鹿馬鹿し…(児童が離れようとする)わかった！…(戻る)この通りだ。俺に、サッカーを教えてくれ。

柳、頭をさげる。

柳　そうか！　教えてくれるか！　一通りの知識はある！　実践を頼む。

音楽。
柳、小学生にサッカーを教えられる様子。
ブラジル体操から、パス練習、シュート練習まで行う。
夕方になり、小学生達は帰っていく。

柳　よし！　気をつけて帰れ！　この柳幹久が教えを請うたこと、決して他言するんじゃないぞ！

小学生達、帰っていく。
柳、覚えたてのリフティングをしながら。

柳　球蹴りも、なかなかに右脳を使うスポーツだ。一概にバカにもできないな。

【１０】

爽やかに家に帰る柳。

柳　ただいま！　お母さん！　手紙は！？　きてる！？

柳、意気揚々と、手紙を受け取りながら、手紙を見る。

柳　「いつもお手紙、ありがとうございます。柳さんもサッカーをやられているんですね。」嘘ではない。俺はサッカーのなんたるかを知っている。「誰にも言わないで欲しいんですけど、実は、この前、サッカー部の男子に告白されてしまったんです」！？（思わずめまいがする。）「返事は待ってもらっていますが、私としては、部内恋愛がサッカー部のためにならないと思うので、断ろうと思います。でも、彼はスタメンに入っているので、やる気を削ぎたくありません。」……。

柳、放心状態で手紙を閉じる。

柳　なんてことだ。俺がちまちま文通している間に、サッカー部の奴らは、直接彼女に、こく、こく、告白していただと。

柳、しばらく深刻に思考を巡らせる間。

柳、決意し。

柳　お手紙ありがとうございます。お悩みごとの件ですが、僕でよろしければ……直接会って、ご相談に乗らせてください。今週金曜日の放課後。18時、地元フードコートの入り口で待っています。

柳、原稿用紙を茶封筒に入れる。

手紙を眺め。

柳　これでいい。話を親身に聞いた上で、折を見て、正式に交際を申

し込む。もし受け入れられれば、彼女もその男子の告白を断る理由ができるし、俺も……全くもって、やぶさかではない！……南無三！

柳、封筒に封をする。

【１１】

金曜日の放課後。
柳なりのおしゃれし、大型ショッピングモールの入り口にて彼女を待つ。

柳　遂に来た約束の日。(鏡を見て)もし、言葉が出てこなくても、焦る必要はない。沈黙は金。雄弁は銀。軽はずみな饒舌こそ、恥と知れ。(鏡をしまい。)ああ、くそ。時間が長い。(舌打ち、顔を背け)待ち合わせ場所をしくじった。我が校の生徒が多い。

柳、身だしなみを整えたり、顔を背けたり、落ち着かない柳。

柳　(腕時計を見る。)十八時になった。……いや、少しの遅刻ぐらい全くもってあり得る。五分いや十分だけ待とう。……五分、七分、九分…はい！

柳、振り向くと、そこには例の女生徒がいる。

柳　あ、あ、あ、あ、あ、あ、どうも、本日はお日柄もよく、ご多忙の折に。

柳、自分を殴る。

柳　いや、今のはなんでもありません。(一瞬、自分を落ち着かせるた

めの間)ありがとうございます！　来てくれたんですね。はい。ここの二階には、フードコートがございます。よろしければ、そこで甘味をつつきながらですね。お話し。……はい。あ、見て回りたいところがある？　もちろん、可能です。見て回りましょう！存分に見て回りましょう！

柳、女性徒と一緒に、ショッピングモール内を廻る。
スポーツショップ内にて、ボールなどを手に取る。

柳　　ええ、あのボールは購入を検討しましょう。サッカーは素晴らしいスポーツです。体を動かすスポーツ全般、私は愛して止みません。そうですか！　悩みも晴れてきましたか！　それはよかった。……少し歩き疲れましたか。では、フードコートで一休みしましょう。

フードコートに行く。女生徒のために、椅子を引く柳。

柳　　どうぞお座りになって。冷たいものはお好きですか？お待ちください。

フードコートの軽食の店に行き。

柳　　すいません、ソフトクリームを一つ。スプーンの数？……一つで、いや、二つで！(独白)調子に乗るな、柳。　大一番はこれからだ。

スプーン２つと、ソフトクーリムを差し出される柳。

柳　　(店員に)どうも、ありがとうございます。

柳、席にソフトクリームを持って戻っていく。
これからの告白に備え、緊張している。

柳　お待たせしました。どうぞ、お召し上がりになってください。

柳、ソフトクリーム越しに彼女を見つめている。

柳　……あの、もし、差し支えなければ、僕と僕と、交際をしていただけませんでしょうか！？

柳、息を切らしている。

柳　「はい」？それは、肯定と捉えていいんですか？いいんですね！？

柳、雄叫ぶ。

音楽。

柳　やったぞ！　柳！　やったぞ！　柳幹久！（喜びのあまり観客に拍手を促しても良い）　ん？はい。

当惑した女生徒は柳に話しかける。

柳　(戻り)え？　そんなに喜ぶ理由がわからない？　いや、だって。あ。「言葉の意味しているものが、具体的にわからない。」あ、ええーっとですね。そうですね。はい。あ、「お友達」、という意味では、ないですね。はい。その交際と申しますのはですね、つまり、男女交際、僕とあなたが、異性としてですね。

その時女生徒が、知り合いを見つける。

柳　ん？どうしました？

柳と女性徒に近づいてきたのは、芹沢含む同校のサッカー部である。

柳　(驚き)芹沢！　それに、サッカー部連中！(うろたえ)ああ、いや、君たち、勘違いしないでいただきたい。僕たちは不純な関係では全くもってなくて、違う！　芹沢！よせ！　異性との交流を一切やめろと俺は言ったわけではない！　ん？　誰だお前。「俺の弟が、お前にサッカーを教えたと言っていた」？　あ、はははは、何を血迷ったことを言っているんだ。(女生徒に) お気になさらないでください。妄言です。(芹沢がなんか言うので) うるさい！　芹沢！　僕も考えを改めた！　サッカーは蛮族のスポーツではない！　口が過ぎるぞ！　芹沢！

思わず芹沢を殴ってしまう、柳。
女性とは完全にヒいている。

柳　あ。(女生徒に)違うんです、普段は非常に温厚なんです。これは今例外的に。(芹沢が「常習犯です！」的なことを言ったテイで) ……黙れ芹沢！

また殴ってしまう。

柳　ああ、違うんです。(女生徒、席をたつ)あ！ちょっと待って！話はまだ終わっていない！　(サッカー部に止められ)やめろ！　離せ蛮族どもが！　(女生徒に)違います、誤解なんです。(行こうとすると、サッカー部の一人に足をかけられる。)貴様、俺の足をかけたな。警備員はいないのか！　こいつらをひっとらえろ！　(女生徒に)待って！(　サッカー部の一人に、殴られる)貴様、俺を打ったな。この野郎！

柳、サッカー部と乱闘になる。
柳が椅子を振り上げたところで暗転。

三幕

【１２】

頬に傷あてをした、柳。

郵便受けを開ける。しかし、そこに手紙はない。

柳　……ない。……ただいま。

柳、自宅の扉を開ける。

柳　お母さん、手紙は？……そう。……ご飯はいらない。

柳、すぐに自室に引きこもる。

柳　弁解の手紙を送って早一週間。未だに彼女からの返答はない。……くそ、畜生！　畜生！　畜生！……小学生にサッカーを習った話が広まったせいで、校内ではどこにいても笑われる。教師からは呼び出され、説教をくらい、ことのついでに弁論部の部員不足が発覚し、廃部を検討するとまで言われた。……畜生！　この俺が、あんな蛮族達と地方教員に。……(胸ポケットからメダルを取り出し)所詮、お前は銅メダリスト。一番でもなければ、特別卓越したものもない、ただの小理屈っぽい学生だ。

柳、今まで女生徒と交わした手紙束を取り出して、窓から放り投げようとする。が、捨てられない。

う、く、くそぉ！（胸に抱き）なんでだ。お前は女人など必要としなかったはずだろう！　柳！　しゃんとしろ！　ただ、以前のように戻っただけじゃないか。

柳、手紙束を見つめ。

もう一通、返事を促す手紙を書いてみようかな。いや、だめだ。裏目にでる可能性もある。……このままずっと返事がこなかったら？……わからん。わからん。あの時の俺を見て、彼女が一体何を思い、今どんな気持ちでいるのか、全く俺にはわからん。

すると、柳、銅メダルと手紙が目に入る。



待て、……あの時彼女は「交際」の意味をちゃんと理解してはいなかった。……確かに俺から交際は申し込んだ。しかし、彼女に、「異性」として好意を持っているということは、俺の口からちゃんと言葉にして伝えていない。……もしかして、彼女は、俺の好意に気づいていないのではないか！？

柳、銅メダル、原稿用紙を持ち。



バカか俺は。何をちまちま文通などという手段に頼っていたんだ。お前が何よりも自信があるのは、その口、言葉、弁舌だろう！？少なくとも、この銅メダルを勝ち取るほどにはお前の弁舌は立つはずじゃないか！　柳！　柳！　柳！（母が「どうしたの！？」と言ってくる。）お母さんのことじゃない！　柳幹久！　そうだ。直接この口で誤解を解き、そして、完璧な弁舌でもって好意を伝える！　それだ！……もし、それでダメなら……きちんと俺は諦められる。彼女のことも、俺の弁舌も。　だが、そうしなければ、俺は、一生後悔する。気がする。もし、運良く弁論部が存続したとしても、今年の大会、このままじゃ俺は、本峰に勝てる気

がしない。柳、柳、柳、言葉を紡ぐのだ、柳！

柳、原稿用紙を取り出して、猛烈に書き始める。

【13】

自転車を引き、びっしりと書かれた原稿用紙の束をくわえながら、あの歩道橋に来る柳。

柳　チャンスは一度きり。もしこれで、彼女を説得することができなかったら……彼女は通学路を変えるかもしれん。よし。(脳内でシュミュレーションをしながら)彼女が来たら、声をかけ、その場に留まらせ、そして、何も言わせず、ひたすらに俺の弁舌を聞かせ、想いを伝える。昨晩必死で遂行に遂行を重ねたこの原稿、一字一句たがわず頭の中に入っている。言葉こそ、俺の最大の武器、言葉こそ、俺の全てだ。

原稿をカバンの中にしまう柳。

柳　……くそ、この国道はいつもこんなに、車通りが多かったか？交通音が弁舌の邪魔になってかなわん。

彼女が来る。

柳　来た！　まだだ。まだ、彼女が歩道橋を降りてきてから、声をかける。焦るな……よし、よし。っは！　気づかれた！？　引き返していく！　なんで！？　待って！

柳、自転車を漕いで、歩道橋を登って彼女を追いかける。

柳　待って、くれ！　俺の、話を、聞いてくれ！　うおおおおお！（そのままの勢いで下に突入する)おおおお！？　ああ！　ダメだ！

曲がりきれない！

柳、思い切り急ブレーキをする。
宙を舞う柳の体と自転車。

柳　急ブレーキによって、前輪を止めた自転車は、車体のスピードを押し殺せず、そのまま後輪が宙に浮いた。国道沿いの歩道橋のスロープで自転車ごと一回転した僕は、驚く彼女の顔を頭の下に見ながら、そのまま、歩道橋の向こうの、道に……ぎゃあああああ！

柳、ものすごい音とともに、自転車ごと歩道に落下する。

柳　ああ、足が！折れたー！

柳、彼女が逃げていくのが見える。

柳　行ってしまう。歩道橋を渡り、向こうの道を走っていく。……せめて、せめて、チラとこっちを向いてくれ！

柳、カバンを漁り、原稿用紙を取り出す。

柳　うおおおお！

柳、バラにした原稿を、力いっぱい天に投げる。
すると、原稿が宙に舞う。
音楽。彼女は、束の間、振り向く。

柳　俺は、君が、好きだー！

一瞬、彼女と目が合う。
しかし、すぐに目の前をトラックが横切る。

柳　今、視線と共に俺の言葉を振り切る君を見て、俺はわかった。返事はなくとも、彼女の心がわかった。

柳、国道沿いを見ると彼女はもう遠くにいる。

柳　……情けない。俺の口からはあんな月並みな言葉しか出てこないとは。

柳、初めて味わう失恋の痛みを胸で感じる。

柳　ああ、痛い。あの一言を言っただけで、俺の心臓はこんなにも痛むのか。

そして、胸ポケットにしまわれた、銅メダルを取り出す。

柳　人の心がわからない。確かに、そうかもしれん。こんなに痛いのは生まれて初めてだ。……だがようやくわかってきた。俺の弁舌に足りないものが一体何か、わかってきた。……本峰、待っていろ。俺は初めて味わうこの痛みを舌に乗せて、今年こそ、金のメダルを取りにいく！

柳、倒れる。

柳　くそ、骨が。救急車、呼ばないと。

高鳴る音楽と、国道の通行音。

満身創痍の柳は倒れる。

暗転。

【幕】